

「終末論」 ビル・J・レオナード

批評と紹介 加山 献

ビル・J・レオナードは、かつてサザン・バプテスト神学校で教会史を教え、現在はノースキャロライナ州のウェイク・フォレスト大学神学部で教鞭を執っている研究者である。本書、「A Baptist's Theology」では、彼が「終末論」の項目を担当している。アメリカのバプテストの神学は根本主義的な傾向が強いイメージがあるが、レオナードの文章はバランスのとれた神学に基づいていることが、最初のページを読んだだけでもすぐに読み取れる。レオナードの専門分野は教会史である。この小論文でも「終末論」および「宣教論」の歴史神学的手法による分析が際立っている。

本書は、多様なバプテストの神学概念の中で「あるひとつの」バプテストの神学的方向性を提示する、という試みにそって編集されている。レオナードが考える「バプテストの終末論」について簡単に述べたい。

わたしはまた、一人の天使が、底なしの淵の鍵と大きな鎖とを手にして、天から降って来るのを見た。この天使は、悪魔でもサタンでもある、年を経たあの蛇、つまり竜を取り押さえ、千年の間縛っておき、底なしの淵に投げ入れ、鍵をかけ、その上に封印を施して、千年が終わるまで、もうそれ以上、諸国の民を惑わさないようにした。その後で、竜はしばらくの間、解放されるはずである。わたしはまた、多くの座を見た。その上には座っている者たちがおり、彼らには裁くことが許されていた。わたしはまた、イエスの証しと神の言葉のために、首をはねられた者たちの魂を見た。この者たちは、あの獣もその像も拝まず、額や手に獣の刻印を受けなかった。彼らは生き返って、キリストと共に千年の間統治した。その他の死者は、千年たつまで生き返らなかった。これが第一の復活である。

(新共同訳聖書 ヨハネの黙示録 20章1節～5節)

レオナードは上記の聖書箇所を小論文の冒頭に掲げている。2000年間の教会の歩みにおいて、この聖書箇所は、終末論に関して数多くの体系と理論を発展させる大きな要因となった。レオナードが指摘するように、現代においても終末論についての神学的思索は尽きるどころか、益々高まっているといえるだろう。

教義学的観点から見て、終末論は細かいカテゴリー<sup>1</sup>と、数多くの神学的立場<sup>2</sup>に分かれている。レオナードはひとつひとつの単語や神学的概念の定義を整理することにより、読者と共通のプラットフォームを築き、議論を展開している。読者にとって、多くの聞き慣れない単語や概念が飛び交う中、最も重要かつ適切な作業であろう。読者との共通の土台を築いた後、レオナードは教会史全体を振り返り、約2000年間の終末論の発展を詳細に追っている。

初代教会の切迫した終末待望に始まり、西暦175年頃に現れたモンタノス派の極端な再臨運動、また、アウグスティヌスの言説などが取り扱われている。続いて、宗教改革期にミュンスターで起こった「預言者」たちのムーブメント、17世紀のイングランドにおける第五王国派<sup>3</sup>の台

<sup>1</sup> キリストの再臨、携挙、千年王国、艱難時代などが挙げられている。

<sup>2</sup> 前千年王国携挙説、後千年王国携挙説、無千年王国説、ディスペンセーションリズムなどについて言及されている。

<sup>3</sup> 第五王国運動は、ダニエル書二章の「五つの王国の幻」に由来する思想である。第五王国派は、アッシリア、バビロン、ペルシア、ローマに続いて、イングランドこそが五番目の国であり、「完全なキリストの王国」であると信じる、過激な終末思想を持ったグループ

頭等、教会史における幾多の終末論的ムーブメントが紹介されている。総じて、1) 社会情勢が不安定になった時、2) カリスマ的なリーダーが現れると同時に、大きな終末論的ムーブメントが起きたと分析されている。

数多くの歴史的出来事を振り返ってみると、レオナードの分析は的を得ている。幾つかの終末論的ムーブメントは、キリスト教の「異端」として歴史の名を残していることも興味深いことであった。教会教父時代から現代に至るまで、そのようなグループが定期的に現れているのである。レオナードは決して特定のグループを非難するような書き方はしないが、特異な終末論の強調は、勢いと同時に危険性をはらんでいることを暗に指摘されているように感じた。

さて、肝心の「バプテストの」終末論であるが、残念ながら「バプテストの終末論」と呼べるような特別なものは歴史上存在しなかったことが結論であろう。(決してレオナードはそのような言い方はしていないが。)バプテストは時代とともに移り変わり続ける「終末論」を有していた。往々にして、その時代をともに過ごした他教派の教会とも、同様の終末観を分かちあっていたといえるだろう。

英国における初期のバプテストの多くは、前述の第五王国運動に大きく影響を受けた過激な終末思想もつグループであり、王政の崩壊に端を発し、多くのバプテストが自ら剣を取り、地上に「キリストの統治」をもたらすために市民革命の戦いに加わった。

アメリカにおいては、新大陸発見こそが聖書で預言されていた「新天新地」の成就であると解釈され、終末論的神学思想は開拓者精神を後押しする役割を担った。アメリカにおける最初期のバプテストの指導者であったロジャー・ウィリアムス(1603-1683)も同様に、切迫した終末観を抱いていたと、レオナードは指摘している。

ドワイト・ムーディ(1837-1899)に代表されるリバイバリスト達はいわゆる「前千年王国説」を説いた。逐語霊感的に聖書のテキストを読み込む「前千年王国」的終末観は、20世紀の根本主義神学に受け入れられていった。レオナードによれば、この根本主義が、現代の南部バプテストの神学の直接的な土台となっているという。

一方、バプテストの中から始められた、まったく違ったアプローチも紹介されている。ウォルター・ラウエンブッシュ(1861-1918)によって提示された「社会的福音」は、教会が世に対して果たすべき役割があることを広く知らしめた。「やがてキリストが統治される時代が訪れる」という終末論的希望は、同時に「平和や正義がおこなわれる社会がやがて来る」という希望にもつながっている、ということをラウエンブッシュは強調した。不正義と略奪が繰り返される世の中であって、教会の宣教こそが、神の国を来たらせる最も重要な要素なのだ。

今日、アメリカの多くの教会が、ほとんどキリストの再臨のみを強調している切迫した終末論的神学を持っている傾向がある。しかし「キリストの再臨」は、数ある終末論の内容のごく一部に過ぎないと、レオナードは強調している。「終末論」は、「正義」、「平和」、そして何よりも、現在に突入するところの「将来的希望」を内包したメッセージであると結論付けられている。日本の文脈とは大きく異なっている、アメリカのバプテストの「終末論」を知る上で、本稿はとても興味深い内容であった。ぜひご一読をお勧めしたい。

---

ーフ。であった。これには多くのバプテストが加わった。詳しくは、大西晴樹、『イギリス革命のセクト運動 増補改定版』(御茶の水書房、2000年)、299-307頁、参照。